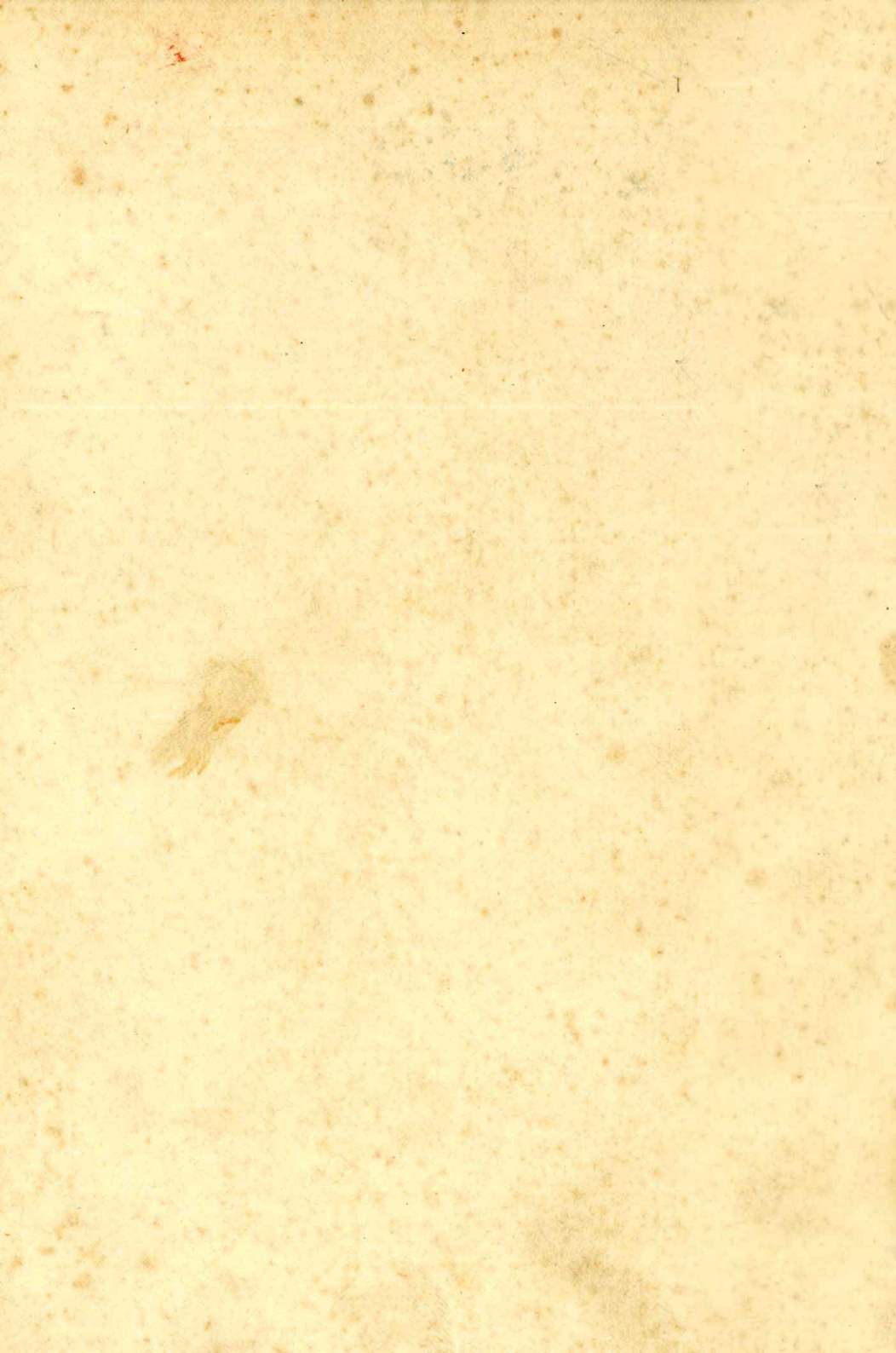




京都
專門學
女子高
校教授

田中健三著

(國文學
講座)

問題 解說

全

株式會社
平凡社
內

受驗講座刊行會

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十五日發行

第十回三冊の内

(非賣品)

國文學講座

全十二冊の内

問題解説

編輯者兼
發行者

會刊講座試驗受

右代表者

策雄藤加

印刷者

薰川濤

○一六番下町麹町市東京

發行所

○一六番下町麹町市東京
株式會社平凡社內

會刊講座試驗受

○三九六二東京座口替振

序

「批評もまた文學である」との思想が、わが學史に於て、極めて新しい立場のものであるといふことは云ふまでもないが、日本文學に對する組織と體系とを持つた批評史研究の進められてきたことも、ここ二三十年を出でないのである。従つて、批評研究そのものが、甚だしく幼稚であることは争へないが、況して、その綜合論、本質論については、著述の公表されてゐるものすら皆無であるといひたい現情である。

僭越にも、自分が、茫々たるこの處女地に鋏を入れることは、社會の謗を受ける以上の何物でもないことを懼れるものであるが、自分としてはこのまゝ社會の要望を默思してゐるに堪へないものがある。新しい世界の開發には、必ずや、棄石といふものがなければならぬと思ふ。自分は、好んでその棄石の役を甘んずるつもりで、批評文學の組織に試案を立て、以て一つの構圖を造つて見たものが本書なのである。

但し、茲に斷るべきは、本書が日本文學大系の一部となるべき理由から、紙數の上に大きい

制限を被つてゐる外、脱稿期日の制約、その他編輯方針上の制限を受けてゐるがために、すべてを豫定通りに運ぶことの出来なかつたことで、その點は甚しく遺憾としてゐる。しかし、やがて他の機會に於て増補訂正することもあらうことを讀者に約束しておく次第である。

特に、その點をぶちまけて云へば、本書は近世の資料を引くに乏しく、明治以降新に興された批評精神の中に盛り込むまでに進められてゐない。すべて、近世以前の豊富な資料の處置に窮したためであつて、その點は特に、豫め讀者にも御詫びしなければならぬ。引用文は、出来るだけそれに親しみを作するため、現代的の慣例に書きかへたものもあるが、自分の老婆心が、却て、原文を傷けることなくば幸である。最後に本書執筆に當つて、「日本歌學史」(佐佐木博士著)「大日本歌學史」(福井博士著)「日本文學評論史」(久松博士著)の三書より、多くの啓示をうけたことを附記しておきたいと思ふ。

昭和十三年六月

武藏野の綠蔭の寓にて

齋 藤 清 衛

批評文學 目次

一 總 論	九
I 文學原理の發見	二三
II 唯心的人性主義	三七
III 批評に於る一般的態度	四〇
二 批評に於る三大樣式	四七
I 觀念的文學評論	五一
1 詩學的批評	五三
a 歌 學	五五
b 連俳式目	五九
2 功利的批評	六二

a	記實と傳達	三
b	教養主義	六
3	道徳的批評	七
a	勸懲主義	七
b	儒教思想	八
4	宗教的批評	八
a	佛教思想	八
b	神道思想	九
II	印象的様式の文學觀	九
1	うれひをやる	一〇
2	あはれをしる	一〇
3	なぐさめあそび	一一
4	幽寂	一二

5	潤	麗		一三	
6	平	淡		一四〇	
7	實	情		一四五	
Ⅲ	鑑賞的様式の諸内容			一四九	
1	新	古	論		一五一
2	典型的批評の種々相			一五九	
a	風情・餘情論			一五九	
b	虚實・諧謔論			一六三	
c	物のあはれ・物真似論			一六九	
d	絶對誠情論			一七四	
3	作品姿態論			一八三	
a	和	歌		一八三	
b	連	俳		一八七	

c	小說・戲曲	一九〇
4	作家作風論	一九四
三	結 言	二〇五

批評文學

齋
藤
清
衛

批評文學

一 總論

國文學の批評精神といふことを考へるにあたり、前以て、批評とはいかなる意味を持つてゐる言葉であるかといふことを解いておく必要がある。批評心理の起原は、すべて人類をめぐる諸現象に關する好惡の感情につながるものと云つてよい。しかし、本能的の好惡の感情が批評精神にまで推移發展するには、必ず、そこに對象に關しての何等かの自覺の精神、並びにそれに對する優劣的判斷が生じなければならない。

此を例に就て云へば、童話を聞かされた子供が、その咄を面白いとか面白くないとかいふだけでは、未だ充分に批評精神が發露したといふわけにはゆきかねるのである。否、桃太郎のお伽

咄を聞き、鬼が島征伐の大團圓の條が面白いと云つたとしても、それだけではなほ批評とはな
りえない。即ち「何故に」との自覺作用が伴はず、お伽咄に對する認識といふものが明白に存
しないところに、正しい判斷は期待されないからである。それが批評となるためには、少くと
も、例へば「猿蟹合戦の結びよりは勇ましくて面白い」とかいふ程度の比較意識がその上に作
用されたものでなければいけないのである。

その他、世間の評判や噂やの類も、かうした意味から批評の一部といふことが出来る。それ
は、數人乃至數十人の意見の一致がそれによつて推定され、そこに、個人の好惡愛憎の感情以
上のもの、即ち、知性の判斷力による作用が思はれるからである。ある口承文學が滅亡するこ
となく、後世に傳承されることを得たに就ては、そこに、世間の好評を博したとか、また人々
の心をひきつけたとかいふ理由が考へられてくる。その他萬葉集の如き歌集の撰定には、必ず
批評精神の働きのあつたことは云ふまでもない。従つて、すべての文學はその創作の際、自覺
の附隨してくるかぎりに於て、すでにある種の批評精神の内在が豫想されるのであつて、優れ
た作品は、優れた批評精神の賜物といふも敢て過言のことではない。しかし、ある作品に對す

る他人の批評がつねに同一であるといふことは不可能である。尤も、作品の程度が幼稚で、甲乙丙の批評家の鑑識が盡く優れて高い場合には、各々の批評がほぼ一致することをその原則とする。小學校の綴り方に對する指導教師の批評の類がそれであらう。しかし、高遠な傑作だけ、それに關する正しい理會者の乏しくなるといふことは、批評の歴史が實證するところであつて、ある高度の作品に對する低い教養を持つ甲乙丙各々の批評の結果は、その各々の鑑識の段階に應じて異つてくることを普通とする。それも、後に述べるやうな規範的な形式批評や、科學的批評やにあつては、なほある程度の照應と合致とが求められるけれど、印象的や鑑賞的内容批評に於ては、特に一致しがたいあるものが豫測される。否、批評が裁斷的でないかぎり、に於て、把束の際に主觀的色彩の添ふことは到底否みがたいところで、例へば萬葉集や源氏物語やに關する契沖、眞淵、宣長の批評さへ、それぞれに多少の狂ひを相互の間に生じてゐるのである。茲には、やはり、批評家に於る文學的自覺の段階、文學理念の差異といふことを考へて見なければならぬ。先づ、この點を一通りわが文學批評史について以下檢べて見ることにしたいと思ふ。

I 文學原理の發見

日本文學に存する文學の諸形態は、ほぼ、世界各國に見られてゐるものに一致してゐる。しかし泰西のそれに較べて、劇文學の完成が甚だしく遅れたとか、叙事文學の中の小説文學の發達が、却て特に早かつたとかいふ兩者間の喰ひ違ひは存してゐる。なほ、文體を律文學と散文學とに分けて見る時、律文學の方が全文學の中心内容に考へられてきたことは東西その軌を齊しうしてゐるが、わが律文學が、短歌詩型と俳句詩型とに固底されていつた歴史には、極めて日本的な著しい特色を求めることが出来る。即ち、抒情、叙事、劇の三方面を綜合しての文學といふものが、全體的に意識されてきたのは悠かに後世のことであるが、「詩とは何か」といふ疑問は、口承文學が記載文學に入ると同時に提示された大きい問題だつたのである。

それは最初に、「こゝろ」に對する意識から出發され、次にそのこゝろの一分野としての感情の作用が反省されてきたのであつた。情緒が添ふまでの言葉は、所謂、意味を持つた有節的の

音聲にすぎないものであるが、そこに感情が動き出ると、自づから音聲にあや、が加はつて歌といふものになる。この過程に就ては、本居宣長の筆になる周到な解説も遺つてゐる。(註一)

ところが、歌は何のために歌はれるか、詩は何のために作らるべきであるか——この問題は、藝術學の根本課題とされてゐる藝術起源説に係はるものであるが、萬葉集や古今集やの辭句はそれに關する重要な二面の動機を物語つてゐる。先づ、感情はこれを表に現はさないと、胸中に鬱結する、歌はこれを晴らしてやるものだといふ風に考へられたのがその一つである。萬葉集の詞書を見ると、「寫^{ノゾク}五臟之鬱結^ヲ」とか「稍寫^ク鬱結^ヲ」とか出てゐるが、(註二)實際の作品を見てもその事實の推定の許されるものが多いのである。

しかし、歌は本能的に感情を發散するさうした動機に基くと共に、それによつてその聽者を動かすといふ目的をも含めてゐる。むしろ、多くの戀歌(萬葉集の相聞歌)は、さうした思想感情傳達の實際的目的を持つものであり、やがては日常語の有用性を踰えて神秘的魅力を持つてゐるといふことが信ぜられるに到つた。「力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をも哀と思はせ、男女の中をも和らげ、猛き武士の心をも慰む」とは、貫之の書いた古今集序文

の一節であるが、假令、その語は詩經の大序に因るものとは云へ、當時の信仰精神から推して、粉飾のない信念の一つだつたといふことが云はれるのである。

もちろん、すでに當時に於て、神人交通の觀念の如きは、古代に比較して、悠かに稀薄化されてきたことは争へないが、巫女が神を呼び出す呪言は、やはり、律文的のものでなければならぬとされ、音曲詩歌の魅力は、立身出世、感情融和、病氣恢復、天災回避等あらゆる方面に亘るものといふやうに考へられた。^(註三)かくて、詩歌の及ぼす魅力が廣大であればあるほど、その因つて來るところが、考察の標的となることは當然のことである。そして、感情内容として「こゝろ」にその中心を求めることにより、一種の唯心論的文學論を立てられたのが、わが批評文學の特色となつてゐる。

茲に和文體で書かれた文學論の始めといへば、やはり古今集の序文を描いてないのであるがその序文は畢竟貫之が一大歌集を編んだに就て、その抱負を示したものだと言つてもよい。従つて、「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける」と、和歌がこゝろに發することは自ら明言しながら、そのこゝろをはつきりと追究する態度を見せてゐない。但